

〔報 告〕

文法基礎知識と英文読解力の向上

Knowledge of Grammar as a Basis of Improving Reading Comprehension

中村 弘子

NAKAMURA Hiroko

要旨：文科省は「世界で勝てる人材の育成」をキーワードに英語教育の抜本改革を進めている。中高の授業が英語で行われるようになり、英語で教える英文法が推奨される中、大学入学時の学生の文法力、読解力の低下が深刻化している。本稿では文型、品詞、句と節という最も基本的な文法知識が、リーディングの読解力と相関することを示し、高校での文法学習に関するアンケートの結果も踏まえ、これらの基本的な文法知識の習得の効果、困難さについて検証する。

【キーワード】文法基礎力、読解力、文法学習

Abstract :

sity students. This study shows significant correlation between basic knowledge of grammar and reading comprehension and highlights the efficacy and difficulty of learning basic components of grammar such as sentence patterns,

【Keywords】basic knowledge of grammar, reading comprehension, grammar learning

1. はじめに

日本の英語教育はコミュニケーション重視になり、文法はコミュニケーションを支えるものであるということが2011年の高等学校指導要領¹⁾にも明記されている。小学校英語に始まり、英語を話すことに慣れ親しみ、楽しみを見出す生徒が増える中、従来の解説型の文法の授業は退屈であると敬遠されがちである。近年では英語の授業を英語で行い、文法も英語で教え、コミュニケーション活動と融合させることが推奨されている(卯城, 2014)²⁾。本学のインテンシブ・イングリッシュ(以下、「IE」)においてもコミュニケーション重視のプログラムが編成されており、2年次ではすべての授業が英語で

行われ、2011年に新設された「英語村」に1学期中に10回通うことが成績の一部に組み込まれている。しかしながら円滑なコミュニケーションを行うためには、4技能(リーディング、リスニング、スピーキング、ライティング)の統合的な能力が不可欠であり(森下, 2013)³⁾、4技能の向上には、文法のしっかりとした基礎を身につける必要がある。IEでは1年次のみ、英語の文法・構文力及び読解力の向上を目的とする精読の授業(以下、「アカデミック・イングリッシュ」)を設け、文法についても日本語で教えているが、学生からは系統的に文法が学べることを評価し、中・高では文法が嫌いであったのが好きになったという声も聞こえてくる。

本稿では、このアカデミック・イングリッシュの授業で、入学時と1年次の終わりに行っている文法基礎テストの結果と、外部テストのスコアとの相関について報告し、文法の土台となる基礎知識（文型、品詞、句と節）の定着を図ることの意義について考察する。

2. 文法基礎力と読解力の向上について

大学入学時における学生の英語力の低下が認められる中、大学生の英語基礎力についての研究が増えている(森下他, 2012⁴⁾; 田島他, 2012⁵⁾, 2013⁶⁾)。田島他(2013)は「RLGテスト」を用い、大学1年生の英語基礎力とTOEICスコアとの比較分析を行っている。「RLGテスト」は近年日本人大学生の英語基礎力を測るために開発されたもので(大場, 2015⁷⁾)、1) R語彙(読んで分かる単語)テスト、2) L語彙(聞いて分かる単語)テスト、3) G(文法の基礎知識)テストの三部からなる。Gテストでは文法領域を6つに分け、各領域10問ずつで構成されている(表1)。

この研究はTOEICのスコア順に分けた6つのグループにおける基礎文法力を分析しているが、すべてのグループで領域EFは正答率が低く、特に領域Fでは名詞節等の節の用法が重点項目であると指摘されている。また、下位グループでは領域Aの品詞の区別とその用法、領域Bの基本文型における動詞の使い方が取り組むべき課題としてあげられている。さらに企業が就職活動生に期待するTOEICスコアの平均は600点であるという調査報告(国際ビジネスコミュニケーション協会, 2012⁸⁾)を紹介し、600点を獲得するためには領域EFの強化が不可欠であると強調し、グローバル社会で求められる英語力である4技能における正確さと流暢さの確保のために、このような基本知識は欠かせないと述べている。

表1 Gテスト文法領域

領域	文法項目
A: 品詞	基本4品詞、その他の品詞、単数・複数
B: 文と呼応	動詞の時制、文型、代名詞など代用表現
C: 動詞の拡充	助動詞、完了形、進行形、受身形
D: 文の拡充	強調文、否定文、Yes/No疑問文、WH疑問文
E: 動詞の転換	不定詞、動名詞、現在分詞、分詞構文
F: 文の転換	名詞節、副詞節、形容詞節、仮定法

本学のアカデミック・イングリッシュで課される文法基礎テストは、このGテストの領域ABEFで取り上げられている文法項目の中でも、最も重要で土台となる文型、品詞、句と節についての知識を問うものである。

3. 参加者とテスト

3-1 参加者

2014年度入学生259人(環境学部121人、経営学部138人)で、入学時及び初年次終了時の2回のVELCテストと2回の文法基礎テストをすべて受けた学生のみを調査対象とした。

3-2 VELCテスト

2014年度より初年次学生のクラス分けテスト及び習熟度テストとしてVELCテストを使用している。VELCテスト“VELC”はVisualizing English Language Competency(英語力の可視化)の略で、学生の英語力の全体的なレベル及びスキル別のバランスなどを分かりやすく視覚的に洗い出す、という意味である。VELCテストのスコア表示には総合スコアだけではなく、分野別(リスニング、リーディング)や、パート別(リスニング語彙力/音声解析力/内容把握力、リーディング語彙力/文法・構文力/内容把握力)のスコアも含まれている。

3-3 文法基礎テスト

文法基礎テストは10個のセンテンスについて文型及び下線部の品詞(名詞、動詞等)あるいは句か節の種類(形容詞句、副詞節等)を書かせる問題(20点満点)からなる。1回目は高校までの知識をテストするために、初回の授業で全く説明なしに答えさせた。2回目は後期の授業の13回目に抜き打ちで行った。一年次の前期、後期と文法の基礎について学習してきて、単なる暗記ではなく、どれだけ知識が定着しているかを調べるためである。

3-4 高校時での文法学習に関するアンケート

2回目の文法基礎テストを行った際に、高校での文型、品詞、句と節の学習に関するアンケートに回答させた。質問項目は以下の3つで、それぞれ4件法(4-とても良く当てはまる、3-少し当てはまる、2-あまり当てはまらない、1-全く当てはまらない)で答えさせた。

高校の英語の授業で文型について学習した。

高校の英語の授業で品詞について学習した。

高校の英語の授業で句と節の種類について学習した。また3つの質問項目に加え、自由記述欄を設けた。

4. 結果

4-1 VELC テストと文法基礎テスト

VELC テストの総合スコア、リーディング (R) 内容把握力及び文法基礎テストの 1 回目と 2 回目の平均点を表 2 にまとめた。

対応のある t 検定を行ったところ、リスニング・リーディング両方の総合力を示すスコアの平均と文法基礎テストの平均には有意差があったが、パート別ではリーディングの読解力を示すリーディング内容把握力のスコアの平均には有意差は見られなかった。

次に参加者を VELC 総合力のスコアに基づき上位群・中位群・下位群に分け、グループ毎の VELC 総合スコア、リーディング内容把握力 (VELCR 内容把握)、文法基礎テスト (G 基礎テスト) の 1 回目と 2 回目の平均点を示したものが表 3 である。

各グループの 1 回目と 2 回目の平均について対応のある t 検定を行った結果、VELC 総合力と文法基礎テストの 1 回目と 2 回目の平均はどのグループでも有意差があったが、VELC リーディングの内容把握力では有意差が認められたのは下位群のみで、上位群ではスコアの平均には差がなかった。

4-2 文法基礎テストの伸び

表 3 に示されるように、文法基礎テストについてはどのグループでも 1 回目と 2 回目の平均に有意差はあったものの、全体の平均差は 2.24 と低い値であった。そこで参加者全員のスコアの伸び率を算出し、下のグラフ (図 1) に示した。全体的には 70% の学生の平均点が上がっており、12% の学生が 2 倍以上の伸び率を示す一方で、21% の学生が 2 回目で点数を下げている。

4-3 文法基礎テストと VELC テストの相関

次に文法基礎テスト (G) と英語能力との関係を探るために VELC テストの総合力スコア (VT) とリーディング内容把握スコア (VR) との相関係数を算出した (表 4)。

上記の結果より、文法基礎テストのスコアは VELC のリーディングでの内容把握力と、リスニングも含めた総合力スコアとも相関があることが示された。

4-4 文法学習に関するアンケート

高校での文法学習に関する 3 つの質問項目について 4 件法で回答させ、各項目の平均と項目別の分布をグラフに示したものが図 2 から図 4 である。

これらの図より「文型」と「品詞」についてはいずれも 85% 以上の学生が 4 (とても良く当てはまる) か、3 (少しあてはまる) を選んでいるのに対し、「句と節」の学習については 30% の学生が 2 (あまり当てはまらない) か、1 (全く当てはまらない) と回答している。

さらに「文型」「品詞」「句と節」の 3 つの項目につい

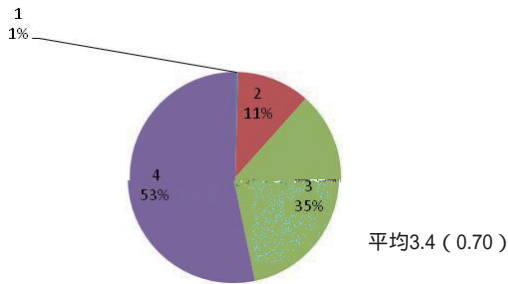


図2 Q1. 高校の英語の授業で文型について学習した。

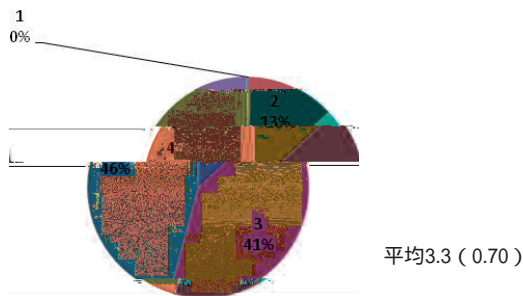


図3 Q2. 高校の英語の授業で品詞について学習した。

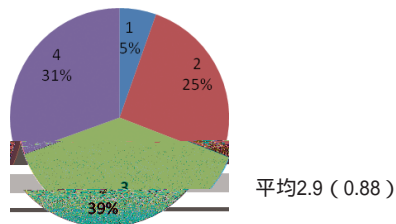


図4 Q3. 高校の英語の授業で句と節の種類について学習した。

それぞれスピーアマンの順位検定を行ったところ、「文型」と「品詞」の順位には強い相関が認められ、「品詞」と「句・節」、及び「文型」と「句・節」にもそれぞれ中程度の相関があることが認められた。

表5 文型、品詞、句・節の学習度の相関とp値

項目	文型 品詞	品詞 句・節	文型 句・節
相関係数	.76	.59	.57
p	.00**	.00**	.00**

**p < .01

4-5 アンケートの自由記述

文法基礎学習に関するアンケートの最後に、中高での文型、品詞、句と節の学習について自由記述をさせた。以下はその抜粋である。

肯定的

中高ではあまり品詞、句・節について学習しなかったため大学で勉強できてとてもためになった。
 中高で文型はやったが大学で再び習って全然理解できていなかったことが分かった。

高校ではざっとしかやらなかったため大学で学べてよかった。

高校の時よりずっとわかるようになった。

英語の基礎的で重要な部分だと思うので、これからも学習していきたいと思う。

中高では苦手だったから大学では少し解消された。

品詞分解、文型を意識するだけでも難しい文の要点をつかむことができるので、早めに習得すべきだと思う。

文型、品詞、句と節の区別が分かれば英作文もしやすくなるだろうと思う。

このような基礎文法を学ぶのは英語を話したり、読んだりする上で大切なことだと思う。

文型は和訳する時にとても役に立つと思う。

文型を知ることによってより一層英語の文を理解できるようになるので、もっと文型について学びたい。

一時的に理解しても忘れやすい事項だと思う。理解できていれば英文は読みやすいと感じる。

中学の時からやっておくべきだと感じた。

すごく重要な学習だと思う。

難しいが、授業で丁寧に教えてもらえるのでとてもうれしい。

This kind of grammar helps me know more about English.

(17) 高校の時ほど詳細ではなかったが忘れていたことを補えてよかった。

中高でやった記憶がなく、大学に入ってから詳しく知った。

否定的

勉強したけれど記憶に残っていないものが多い。

何となくの理解で今でもわかっていない。

中高でもやっていたと思うが理解していない。

句と節の違いがよくわからない。

そもそも品詞や句・節の日本語の意味がよくわからない。

とても難しくわかっていない。

英語の学習の中で一番苦手な分野だ。

和訳では必要だがコミュニケーションではあまり重要ではないのでは。

文法が苦手なのでとても難しかった。理解するにはまだまだ時間がかかりそうだ。

話すにあたっては文型の意義が見いだせず覚えようとしなかった。

中高で深く取り上げられなかったので戸惑った。

あいまいです。

何が何だか分からなかった。

5. 考察とまとめ

本稿では、初年度のIE終了後にVELC総合力スコア及び文法基礎テストの平均点が上位群、中位群、下位群のすべてのグループで有意に上昇したことが示された。さらに文法基礎テストの平均点が、参加者全体としてはVELCテストのリーディング内容把握力だけではなく、総合力スコアと相関があることが認められた。以上のことから、文法基礎力がリーディング力だけではなく、英語の総合力にも影響を与えていることが示唆された。

一方、レベル別に検証すると、リーディング内容把握力については下位群のみに1回目と2回目の平均に有意差が見られた。この結果に注目すると、下位群では大学入学時に比べると、初年度終了時に文法力が向上したことがリーディング内容把握力の伸びに貢献した可能性も視野に入れ、文法基礎テストの結果を、レベル別及び3つの項目(文型、品詞、句と節)別に比較分析し、各レベル別の文法基礎力について再考する必要がある。

今回の結果から、英語学習における文法基礎知識の重要性が覗えるが、本学の学生の文法基礎力の定着度は十分であるとは言えない。2回目の文法基礎テストの平均点は20点満点中12.3点で1回目の平均点(10.1点)より2.2点上昇しただけであり、伸び率についてもかなりのばらつきが認められた。高校での文法学習について行ったアンケート調査の結果、9割近い学生が文型や品詞について学んでいる一方で、句や節については3割の学生が全く学習しなかった、あるいはほとんど学習しなかったと回答している。文型と品詞の学習度の相関は高いが、品詞と句・節、文型と句・節の相関が下がることから、句と節についての学習が不十分であったことが推測できる。

自由記述にもあったが、このような文法基礎力は少しでも早い段階から伸ばしていく必要があるが、コミュニケーション重視の教育では注力されていないのが現状である。文法基礎力はスピーキング力の向上にはあまり必要ではないと述べている学生がいることから、文法力がコミュニケーション力を支えるものだという認識を学生に持たせることが大切である。

新年度に向け、IEプログラムのカリキュラム改革を進めているが、コミュニケーション重視のプログラムにおける文法学習の扱いが問題になっている。本結果からリーディング内容把握力のスコアにおいて、一年次終了時に平均点が有意に上がっていたのは下位群のみであったことから、リーディングの授業内容について再検討し、内容把握力、さらには総合力を伸ばすためにレベル別に

内容を変える必要も考えられる。グローバル化が進む日本企業が求める英語力について、小池(2010⁹⁾は次のようなTOEIC900点以上取得者の声を取り上げている。「英語教育というと、外国人講師と簡単なやりとりをすることと思っている人が多いが、本当に必要なのは強固な文法・語彙に基づく文章作成能力及び理解力である。」1人でも多くのグローバル人材を輩出するためには文法の土台を固める必要がある。

参考文献

- 1) 文部科学省(2012)『高等学校学習指導要領解説』, 文科省ホームページ.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1304427.htm(閲覧日2015年8月20日)
- 2) 卯城祐司(2014)『英語で教える英文法: 場面で導入、活動で理解』, 研究社.
- 3) 森下美和(2013)「日本人英語学習者のスピーキング力に関する調査: 英語圏での留学経験者を対象としたアンケート調査から」, 『ことばの科学研究』第14号, pp. 63-74.
- 4) 森下美和・山本誠子・中西のりこ(2012)「非英語専攻の大学生の英語学習に関する意識と統語知識: 統語処理のトレーニング教材作成のための予備調査」, 『神戸学院大学経営学論集』第9巻第1号, pp. 89-103.
- 5) 田島祐規子・加藤千博・村上嘉代子・前川浩子(2013)「大学初年次英語教育における「RLGテスト」の形成的利用法」, 『中部地区英語教育学会紀要』第42号, pp. 167-174.
- 6) 田島祐規子・加藤千博・村上嘉代子・前川浩子(2012)「RLGテストの形成利用に向けて レベル別英語指導への提案」, 『中部地区英語教育学会紀要』第41号, pp. 45-52.
- 7) 大場昌也(2010)「学士力(英語)測定のための『大学標準英語学力テスト』の開発」, 第40回中部地区英語教育学会・石川大会発表・提案要項集, p. 43.
- 8) 国際ビジネスコミュニケーション協会(2012)「就職活動における英語の必要性」, 『TOEIC レポート』
<http://square.toeic.or.jp/globalbusiness/report/02>
(閲覧日2015年8月20日)
- 9) 小池生夫(2010)『企業が求める英語力』, 朝日出版社.

(受付日2015年8月28日 受理日2015年11月11日)